

今月のみことば 2018年11月

「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら…」
(マタイの福音書5章20節)

ドラマを見ると、そこにいろいろな人々が登場する。大きく分けると、正しい側と悪い側だ。これがはっきりしているほど、ドラマは分かりやすく面白い。そして最後は悪者がコテンパンにされるのを見て視聴者は溜飲を下げる。そこには一種のカタルシス(爽快感)が生まれるほどだ。

しかし、私たちが、悪者と自分を重ね合わせて見ることはほとんどない。大抵は、正義の味方と自分を重ね合わせているはずだ。聖書から見ると、ここが問題である。つまり、私たちは基本的に自分を正しいと考えずにはいられないのだ。そして、自分が今苦しんでいるのは、誰かのせいだ、と考え、自分が変わらなければならないとはまず考えない。

ゆえに、他人を注意したり、叱責したりするのは極めて難しい。必ず反発を食らうばかりか「倍返し」されるのが落ちである。

最近のパワハラ(パワーハラスメント。立場の弱い人に対する精神的な虐待)やモラハラ(モラルハラスメント。相手を貶めて、精神的な奴隷状態におく虐待)が問題になっている。不思議なのは、加害者に全く反省がないどころか、自分が相手の尊厳を踏みにじっている、という自覚が欠如していることだ。それどころか、自分の方が被害者であると装うことも珍しくない。

こうしてみると、自分が正しいと言い張ること自体が、かえって正しくないことの証左ではないだろうか、と思えるほどだ。それどころか、自分を正しいと自認することに、ほとんど何の意味もないことがわかってくる。

「義人はいない。一人もない。」(ローマ3:10)と聖書は言うが、「罪人」の大半が、自分を正しい、と思っている、というのは何と滑稽なことだろうか。

「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、入れません」(マタイ5:20)とイエスは言われた。弟子たちはあつけにとられたに違いない。当時、彼らほど「正しい」と思われていた人々はいなかったからだ。その続きを読むと、行為に及ぶ前の思いまでが問題にされていることがわかる。淫らな思いだけでも姦淫をしたのと同じ、正当な理由なく怒っただけでも殺人をしたのとさばきは同等、敵を愛せよ、という点に至ってはもはや私たちの中で自分を「正しい」と言っている者は一人もないことがわかる。私たちが「正しい」と言っているのは、まさにどنگりの背比べに等しい見事に過ぎない。

預言者イザヤは「私たちの義はみな、不潔な(直訳:月のもので汚れた)着物のようです」(64:6)と言った。どれだけ洗っても永遠に清くなることはない。

しかし、聖書は、「私たちの義」ではなく、キリストの義があることを教えてくれている。キリスト以外に、真に正しい方は一人もおられない。その御方が私たちの罪を背負って十字架にかかり、罪の負債を全額支払ってくださった。ここに、私たちが神の前に正しいとされる唯一の根拠がある。それ以外の「正しさ」はすべて偽りであり、高慢以外の何ものでもない。



今も人気の衰えない「水戸黄門」



聖書の解釈を独占していた律法学者、パリサイ人